

美容師になることを選んだ女性たち

ガーナ都市部で新展開する女性の職業

織田雪世

はじめに

ガーナはアフリカ諸国のなかでも女性による経済活動が活発なことで知られている。女性が労働力全体に占める割合(2001年)は、サブサハラ・アフリカ諸国の平均42.8%に対し、50.4%と高い(World Bank [2003])。ガーナ女性は慣習的に、夫から独立した収入源と財産をもち、家計を補完している。実質的に一夫多妻の傾向があり、また配偶者はそれぞれの親族とも関係を維持しようとするため、女性は完全には夫に依存できない(Clark [1989] ほか)。したがって、自分自身や子どもの生活を安定させるためには、女性も個人で自由に使える現金をもつことが重要なのである。

1970～80年代の経済危機とそれに続く構造調整政策のもと、とりわけ都市部では親族紐帯が弱まる一方で婚姻関係が不安定になり、女性にかかる負担が増している(Awumbila [2001]; Mikell [1997])。一方で、女性は生産資源や教育へのアクセスが限られているほか、再生産労働の大半を担わねばならず、男性の約1.7倍の時間を家事に費やしている(Awumbila [2001]; Brown [1996: 22-27]; GSS [2000:38])。そのため女性はインフォー

マル部門、とくに農業や商業につくことが多い。なかでもガーナの首都があるグレート・アクラ州では、女性の40.5%が商業に従事している(GSS [2002:31])。ガーナの女性商人については多くの研究があり、夫からかなりの独立性を保った経済活動をしていることが注目されてきた。ただし70年代末～80年代初頭の商業統制と抑圧的政策は女性商人に大きな損害を与えたほか、その後も男性を含む失業者が流入したことで、同業者間の競争は厳しくなっている(Clark and Manuh [1991])。

こうしたなか、グレート・アクラ州では1984年から2000年の間に、調理、ホテル・レストラン、美容などのサービス業[†]に従事する女性の割合が6.1%から14.1%へと倍以上に増加した(GSS [1987:53-66]; [2002:31])。なかでも美容師業は、増加が著しいというだけでなく、女性によってほぼ独占された数少ない経済活動の一つであり、しかも一種の技術職という点で、これまで女性の間に一般的であった農業や商業とは大きく異なる。し

† 1 ISSER (ガーナ社会経済統計研究所) ed., *The State of the Ghanaian Economy* では国の経済を農業・工業・サービス業の3部門に分けているが、本稿ではガーナ統計サービス (GSS [1987]; [2002]) に従い、より詳しい職業分類を用いた。

かしその実態や増加の背景については、まだほとんど知られていない。

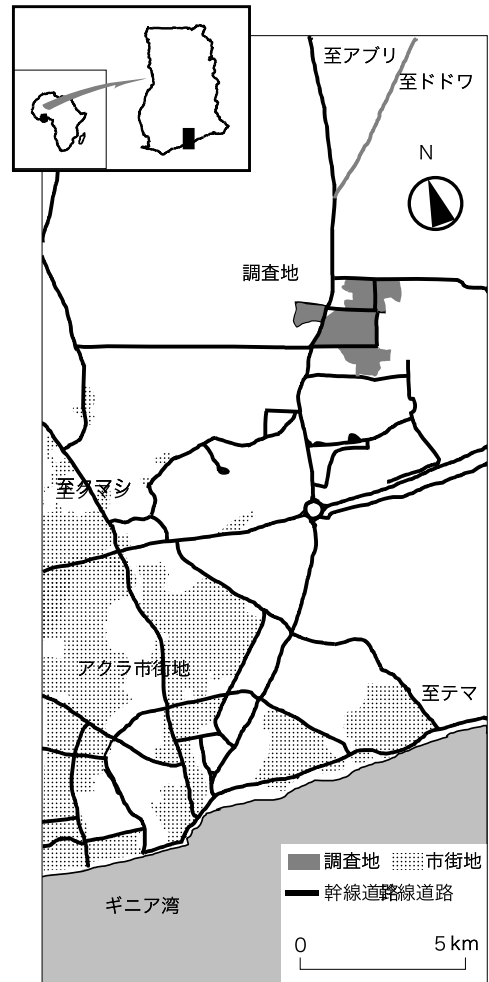
筆者は2000年から2002年にかけての約22カ月間、ガーナの首都アクラ近郊の町マディナで、美容師業の形態や就業者の実態に関する調査を行った^{†2}。本稿では、ガーナ女性による経済活動の側面として都市部における美容師の増加について報告し、その背景を考察する。以下では美容師への需要を支える要因に触れたあと、参入者の特徴や職業選択過程に着目し、ガーナの社会・経済変化という文脈から、近年の美容師増加をもたらした要因を考えてみたい。

1 パーマ技術の普及とヘアサロンの急増

調査地マディナは、首都アクラの北東約17キロに位置する、人口約7万7000人の町である(図1)。都心への通勤圏に位置し、アクラの拡大とともに商業地・住宅地として発展してきた。さまざまな民族・宗教・所得層が混在するが、都心で雇用労働、あるいはマディナ市内で自営業に従事する者が多い。

2001年のマディナ市におけるヘアサロン(以下、サロン)の分布状況を示したのが図2である。サロンのなかには、店舗(大小さまざま)をもって営業するものと、店舗をもたず公共建築物などの軒下や自宅で営業するものがある。マディナ市で最も多いのは、木造の小店舗で営業するタイプである。聞き取りによれば、1980年代初頭の同市で店舗をもって営業していたサロンはわずか数店であ

図1 調査地の位置



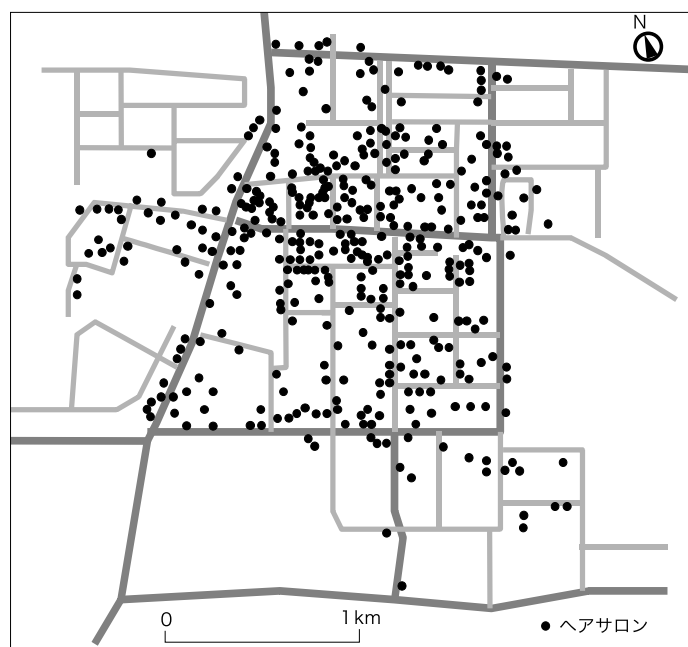
(筆者作成)

ったが、2001年には300店以上に増加している。大半は開業10年以内であり、調査した67店のうち最も古いサロンでも89年の開業であった。また半数以上(36店)が99～2001年、約3割(19店)が96～98年の間に開業していた。

ガーナ女性は1970年代頃まで、日常的には自宅で、糸で巻くなどして整髪していた。今日のようなサロンの増加を可能にしたのは、「ヘア・リラクシング」(以下、パーマ)とよばれる一種のストレ

†2 筆者はマディナ市全体のサロン分布状況を踏査したのち、67店を対象に開業年等に関する広域調査を行った。さらに、うち22店で働くサロン就業者110人中53人を対象に、質問票をもちいた聞き取り調査を行った。

図2 マディナ市街におけるサロンの分布状況（2001年）



(筆者作成)

ート・パーマの普及である。欧米から持ちこまれたパーマは、80年代頃から一般のサロンでも扱われるようになり、90年代後半に急速に普及した。アフリカ系の人々の髪は巻きが強く、櫛でとくすのは容易ではない。パーマはこの髪を直毛に近い状態にし、整髪の手間を省くとともに、きわめて多様な髪型を作ることを可能にして、都市女性の圧倒的支持を得たのである。

構造調整下のガーナでは、自由化による輸入品へのアクセス拡大と援助資金の流入により、消費活動が活発化した（国際協力事業団 [2002 : 6]）。パーマはこの波に乗って普及したと思われる。推進役となったのは、パーマ剤や整髪料を製造するさまざまな会社である。とりわけ1990年代後半以降は、こうした会社の進出が相次いでいる。なかでも有力なのはロレアル（L'Oreal）^{†3}やユニリーバ（Unilever）など国際的な大企業の系列に属する

ものである。各社は広告やキャンペーン、製品開発、美容師学校設立やヘアスタイル・コンテストを通じて、積極的に市場拡大をはかっている。

ところでパーマをかけた髪は針金状に伸びきってしまうため、そのままでは美しいと見なされていない。「人前に出られるような」髪型にするには、洗髪後にさまざまな整髪料をもちい、カーラーで巻き乾燥させねばならない。自分でこれらの作業をするのは容易でないため、人々は洗髪のたびにサロンを訪れる。調査によれば、平均的な来店頻度は週1回程度、料金は約0.59米ドルである。また髪が伸びれば根元部分に再び巻き毛が目立つため、約6週間ごとの再パーマも必要である（写真）。こうして一度パーマをかけた女性は、以後は頻繁か

つ定期的にサロンへ通うことになる。

2 ヘアサロンで働く女性たち

サロンで働く人々は大きく、(1) サロンを所有し経営する美容師（以下、オーナー美容師）、(2) サロンに雇われている美容師（同、ワーカー）、(3)

†3 白色人種向けヘアケア製品の大手ロレアル社（本社：フランス）は2000年、アフリカ系人種向けヘアケア製品で世界有数のカーソン社（Carson, 本社：アメリカ）を買収した。カーソンは1995年の南アフリカ共和国に続き、97年にガーナへ進出していた（聞取り；Tomlinson [2000]）。聞取りによれば、カーソン社が第2の海外進出先として西アフリカを選んだのは、東・南部アフリカと比べてヨーロッパと接触の歴史が長く、欧米の文物を受け入れる素地があったためだという。ガーナは西アフリカの英語圏のなかでは治安がよく、電気・水などのインフラも比較的整っていたため、拠点として選ばれた。



髪の根元部分に再パーマをかける様子（耳にカバーをつけないことも多い）

技術習得のため実地で職業訓練をうけている者（同、見習）、の三つに分類できる。これらサロン就業者の大半は10代後半～30代前半の女性である。筆者が聞き取り調査をしたサロン就業者52人の平均年齢は、オーナー美容師31.7歳、ワーカー27.1歳、見習21.2歳であった。

オーナー美容師18人からの聞き取りによると、彼女らの大部分は学校教育を修了したのち見習になり、技術を習得した。その後はワーカーをしたり、店舗をもたず自宅で営業したりして働き、やがて自分自身の資金を元手に、もしくは夫や父親の援助を得て、自前の店舗を開店している。なかには例外もあるが、オーナー美容師をめざす人々の多くは、これに類した段階を踏むことを想定していると思われる。

美容師になることを決めた女性たちは、保護者の経済的支援をうけて技術を学び、段階的に自活していく。まず見習の間は賃金の支給はなく、逆にサロン側へ入門料を支払わねばならない。食費や交通費の補助もなく、聞き取りをした見習（独身者^{†4}）のほぼ全員（25人中24人）が親や親族等に生活を依存していた。一方ワーカーは、大半がガーナの法定最低賃金より高い金額を稼ぎ、独身者の半数（6人中3人）がみずから食費を賄ってい

た。さらにオーナー美容師の売上は、最低でも法定最低賃金の1.5倍から6倍にのぼると推計された。独身者のほとんど（8人中7人）が少なくとも自分の食費は自分で稼いでおり、うち2人は独力で自分と子どもの生計をたてていた。

しかし美容師たちは、経済的見通しだけにとづいてこの職を選んだのではない。例えばある見習は教師をめざしていたが、会計士との婚約を機に美容師になることを決めた。美容師として自営業に従事すれば、家庭との両立も可能だと考えたのである。かつてガーナの女性は、親族や子どもから家事労働面での支援をうけつつ、経済活動と結婚生活を両立させてきた。だが都市化や教育の普及が進むにつれ、こうした支援は期待しにくくなっている。現在グレーター・アクラ州の平均世帯人数は4.6人にすぎず（GSS[2002:24]）、特に若い女性は一人で家事や育児を引き受けざるを得ない。この点オーナー美容師は、営業時間を自分で決めたり、サロンで子どもの面倒をみたりと、雇用労働よりはるかに融通がきくほか、見習という無償労働力の手を借りることもできる。そのため経済活動と家事の両立も、比較的容易なのである。

3 美容師数の増加

以上みたように、女性たちは経済面・家事労働面の利点を念頭に、美容師業界に参入してきた。その結果、サロンの数は近年急増している。1991年に開業したあるサロンでは、当初は1日20～30人にのぼった客数が、現在では1～10人に減少し

†4 ガーナでは既婚者の場合、夫が食費を分担することになっている。聞き取りを行ったサロン就業者の場合も、夫がガーナ国内にいる場合の食費はすべて、基本的には夫によってまかなわれていた。したがってここでは、独身者についてのみ述べるものとする。

ているという。美容師自身も何人かが「かつては儲かったが、これだけサロンが増えた今、美容師の仕事だけでは食べていけない」と語っており、店舗をもつサロンの7割以上が小規模な副業に従事している。こうした状況にもかかわらず、現在も多くの若い女性が入門料を支払ってまで見習になっている。また、調査した見習いのほぼ全員が「将来は美容師になりたい」「サロンを開店したい」と語っている。これは何を意味するのだろうか。

ここで注目されるのが、教育改革と若者の雇用問題である。ガーナは構造調整政策の一環として、1987年に教育制度改革に着手した。改革目的の一つは小・中学校教育の拡大・平等化であり、さらに96年には小・中学校教育の無償・義務化をめざしたプログラムを開始した。その結果、小・中学校への就学率は倍以上に伸びた。だが一方で、高校や大学の受入れ体制は整っていない。中学校を卒業しても高校へ進学できる者は半数以下、高校卒業者のうち大学などへ進学できるのはわずか1割である (MoE [2000] ; UNESCO [2003])。

現在美容師業に参入しようとしている者の多くは、この改革の影響を受けた世代に属する。同年代ガーナの女性で中学校までの在籍経験を持つ者が46.7%にすぎない (GSS[1999:12]) のに対し、調査した見習いのうち同程度の学歴を持つ者は8割以上にのぼる。見習たちの学歴では政府系機関や企業への就職は難しいが、かといって商業や農業には、あまり魅力を感じていない。見習たちがよく口にするのは「将来どこでもやっていけるよう、手に職をつけたい」という言葉である。男女間の分業が顕著なガーナの場合、女性の職業教育として一般的なのは仕立屋、調理師、美容師の三つである。見習たちはこれらの選択肢から比較的費用のかかる調理師を外し、残る二つのなかから、各自の興味・適性に沿って美容師を選んだものと思

われる。

若い女性による美容師選択が増加しているもう一つの背景に、美容師という職に対する見方の変化がある。かつて整髪技術が単純だった頃、美容師には「誰にでもできる、小・中学校中退者のする仕事」とのイメージが持たれていた。しかし新しい髪型の導入とともに技術が専門化し、職業訓練の制度化も進んだ結果、こうした見方は変化しつつある。華やかなサロンで身綺麗に装い、欧米の技術で美しい髪型をつくりだす美容師の姿は、若い女性に「技術職」「おしゃれで近代的な職業」というイメージを抱かせるようになっている。

見習の親から見ても、美容師は女性に囲まれ、顧客層も比較的安定しているため、不特定多数の人々と交渉する商業や飲食業よりも安心して娘を託すことができる。費用も高校や職業学校より格段に安い。一方オーナー美容師側からみても、見習を採用すれば多額の臨時収入と無償の労働力が得られるほか、指導能力があることを周囲に示すこともできる。美容師業は限られたサロン面積に多くのスタッフを収容でき、客の少ない日も互いの髪で練習できるため、見習労働力を吸収するのはさほど難しくない。以上の要因から見習は、小・中学校教育を修了した女性にとって有力な選択肢のひとつになってきたと考えられる。そしてその結果、美容師の数が近年急速に増加してきたのである。

おわりに

美容師業は、構造調整下の輸入・消費ブームを反映して都市部に住む女性の間で急増した経済活動である。美容師が人気を博しサロンの数が増加している背景には、女性の家事・育児をめぐる労働環境の変化、自由化政策のなかでの企業活動の

活発化、教育制度改革にともなう若者の進学・雇用機会の変化など、さまざまな状況の変化が存在していた。そのような変化のなかで、美容師業への参入は、女性が資源アクセスの制限や性別役割分担といった障害に対応しつつ、自らの生計をたてていこうとする試みのひとつとして評価できる。近年における美容師業の展開が、都市に生きる女性の職業選択の幅を広げたことは間違いない。

とはいえ、オーナー美容師が労働力や収入を補完しようとして見習を採用するに従い、美容師の数は等比級数的に増えてきた。その結果、ここでも同業者間の競争が激しくなっている。大量の見習は、すでに潜在的失業者の一時的な隠れ蓑になっているのかもしれない。ほかに有力な経済活動も見当たらない現在、女性たちは今後どのように行動していくのだろうか。引き続き注目していきたい。

〔参考文献〕

- 国際協力事業団国際協力総合研修所 [2002] 『ガーナ国別援助検討会報告書』。
- Awumbila, Mariama [2001] “Women and Gender Equality in Ghana: A Situational Analysis,” in D. Tsikata ed., *Gender Training in Ghana: Politics, Issues and Tools*, Accra: Woeli Publishing Services.
- Brown, C. K. [1996] “Roles and Household Allocation of Resources and Decision-Making in Ghana,” in E. Ardayfio-Schandorf ed., *The Changing Family in Ghana*, Accra: Ghana University Press, pp. 21-41.
- Clark, Gracia [1989] “Separation between Trading and Home for Asante Women in Kumasi Central

- Market, Ghana,” in R. R. Wilk ed., *The Household Economy: Reconsidering the Domestic Mode of Production*, Boulder: Westview Press, pp. 91-118.
- Clark, Gracia and Takyiwaa Manuh [1991] “Women Traders in Ghana and the Structural Adjustment Program,” in C. H. Gladwin ed., *Structural Adjustment and African Women Farmers*, Gainesville: University of Florida Press.
- GSS (Ghana Statistical Service) [1987] *1984 Population Census of Ghana: Demographic and Economic Characteristics: Greater Accra Region*.
- [1999] *Ghana Demographic and Health Survey 1998*.
- [2000] *Ghana Living Standards Survey Report of the Fourth Round* (GLSS 4).
- [2002] *2000 Population & Housing Census: Summary Report of Final Results*.
- Institute of Statistical, Social and Economic Research [annual series] *The State of the Ghanaian Economy*.
- Mikell, Gwendolyn [1997] “Pleas for Domestic Relief: Akan Women and Family Courts,” in G. Mikell ed., *African Feminism: The Politics of Survival in Sub-Saharan Africa*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, pp. 96-123.
- MOE (Ministry of Education of Ghana) [2000] The Ghana Education Website, Online, [http:// www.ghana.edu.gh/home.html](http://www.ghana.edu.gh/home.html) (2003年5月3日取得).
- Tomlinson, Richard [2000] “L’Oreal’s Global Make-over: How Did a Brit from Liverpool Turn an Emblem of French Chic into an International Star? One Brand at a Time,” *Fortune*, September (2).
- UNESCO [2003] Education Statistics Online, [http:// portal.unesco.org/uis/](http://portal.unesco.org/uis/) (2003年4月8日取得).
- World Bank [2003] 2003 World Bank Africa Database CD-ROM.

(おだ・ゆきよ／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻)

訂正

52 ページ 15～16 行目の「その結果、小中学校の就学率は倍以上に伸びた。」の部分以下の通り訂正します。「その結果、小中学校における女子就学者数は 1.3 倍以上に伸びた。」